

ひょうご

—神と仏—

伝説紀行

北野の文殊

文殊さまの知恵比べ

伝説

北野の文殊

文殊さまの知恵比べ

紀行

市川の流りに沿って

- ・市川の流りに沿って
- ・人々に愛される文殊様
- ・七種山と金剛城寺

関連情報

用語解説

参考書籍

所在地リスト

北野の文殊

文殊さまの知恵比べ

文殊（もんじゅ）様と言えば、知恵（ちえ）のすぐれた仏様です。あちこちのお寺で祭られていて、たくさんの人たちが、文殊様に「どうぞ知恵をお授けください」とお願いします。その文殊様同士が知恵比べをしたら、どうなるのでしょうか。

昔、播磨（はりま）にある北野の村に、文殊様がいらっしゃいました。その文殊様が、ある日、天橋立（あまのはしだて）を見物しがてら、切戸（きれど）の文殊様を訪ねようと思い立ちました。さっそく旅支度をして出かけ、天橋立をながめた後で切戸へとやって来ました。

「北野の文殊やないか。よう来たのう。どうじゃ、切戸はええとこやろう」

切戸の文殊様は、にこにこしながらむかえてくれました。

「ほんまやのう。景色もええが、ここのお寺もお参りの人がぎょうさんあって、たいしたもんやなあ」

お参りの人が数えるほどしかない北野の文殊様は、感心してそう言いました。



二人でお酒を飲みながら話していると、切戸の文殊様は、そのうちにこんなふうにくちを言い始めました。

「そやけどなあ、毎日毎日拝まれて、たのみ事ばかり聞かされたら、ほんまにかなわんもんやで」

「あほなことを。こないにお参りしてもろうて、そんなこと言うとなら、ばちが当たるで」

北野の文殊様はそう言いましたが、内心、うらやましくてたまりません。どうにかして、切戸の文殊様と入れかわりたいものだと考えました。一方の切戸の文殊様は、こんなふうに思いました。

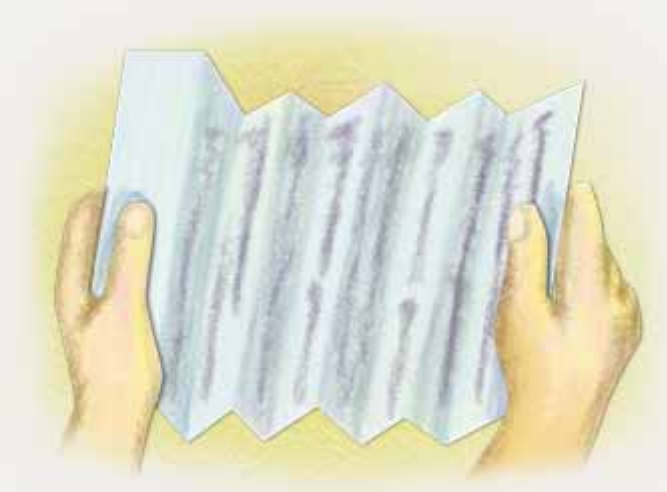
「あないなこと言うて、切戸をほめとったけど、あの北野の文殊は知恵の働くことで有名なやつや。いっぺん、北野がどないな具合か確かめたらう」

切戸の文殊様は、北野の文殊様が帰る後をそっとついて、北野までやって来ました。お寺の外で、北野の文殊様がおよめさんに土産話をしているのを、そっと立ち聞きしてみますと、

「切戸ちゅうても、たいしたことあらへんなあ。景色だけはええけど、あないにお参りが少なかったらあかん。北野とは比べもんにならへんわ。よそへ行ってみたら、自分とこのええのがわかるなあ」などと話しているのが聞こえます。

「ほれみてみい。これやから油断でけへん。切戸ではあないなこと言うったのは、うそやったんやな。やっぱり、北野の方がようもうかってるんや」

切戸の文殊様はぶつぶつ言いながら帰りましたが、「何とかして北野の文殊と入れかわることはできないか」と、そればかり考えていました。



しばらくたって、北野の文殊様から手紙が届きました。切戸ではお世話になったから、お返しに北野へもきてほしいと言うのです。ただ、正月の二十五日が、お参りが一番少ない、ひまな日だから、その日に来てほしいと書いてありました。

正月の二十五日、約束どおり切戸の文殊様は、北野の文殊様の所へやってきました。

「北野の文殊よ、なかなかええ景色やないか」

「景色言うても山しかあらへんがな」

北野の文殊様の手紙には、たしか今日はお参りが一番少なくて、ひまだと書いてありました。ところが、お参りの人を見ていると、次から次へひっきりなしです。

「お参りも多いやないか」

「いやいや、ほんまに不景気なもんやで」

切戸の文殊様がほめても、北野の文殊様はちっともじまんしません。切戸の文殊様は、それが余計に気になりました。北野の文殊様が、自分の所をちっともじまんしないのは、北野がよほどいいところだからにちがいない。そんなふうに思いました。

そこで切戸の文殊様は、じょうだんめかして、「どうや、いっぺん入れかわってくれへんか」と言ってみました。

「いやいや、こんなところでも住めば都や」

北野の文殊様はそう答えましたが、顔はにこにこしています。切戸の文殊様は、ますます北野が良い所のように思えてきました。そこでどうしても無理にたのんで、とうとう入れかわってもらったことになったのです。

ところが入れかわった次の日、ひとりのお参りもありません。それどころか、何日経っても、お参りの人はやって来ません。

「こらいったい、どないしたんやろう」

そこで切戸の文殊様は、近所に出かけて行って、おひやくしょうさんにたずねてみました。するとおひやくしょうさんが言うのです。



「お参りがあるのは、一年でも正月の二十五日だけですわ。他の日にお参りする人なんかありまへんがな」
そのうえ、北野の文殊様にはおよめさんもないというのです。北野の文殊様は、切戸の文殊様が立ち聞きしているのを知っていて、一人で話していたのでした。

「しもた、北野の文殊にいっばいくわされたんや。」
切戸の文殊様はくやしがりましたが、もう間に合いません。

それからというもの、子供たちに
切戸の文殊はあほ文殊
北野の文殊は知恵文殊
と歌われるようになったそうです。

北野の文殊 文殊さまの知恵比べ

おわり

紀行「市川の流りに沿って」

市川の流りに沿って

姫路市の東を流れる市川は、播磨（はりま）最北端の神河町に源をもつ。あとひとつ山を越えれば、但馬国（たじまのくに）に入って円山川（まるやまがわ）水系に至るため、両水系をつなぐ道は古くから重要な交通路であったし、現在も、河口には姫路港がある。その市川の中流あたり、ちょうど市川が中国山地にさしかかる場所が、今回の伝説の舞台である。

人々に愛される文殊様



神積寺（看板）



神積寺（本堂）



本堂の正面



宝篋印塔

文殊様のお話で有名な妙徳山神積寺（じんしゃくじ）は、市川から1kmほど東の、山のふもとにある。「田原の文殊さん」と親しまれる神積寺は、天台宗の寺院として10世紀の末ごろに創建され、「播磨天台六山」の一つとして繁栄したが、後に全山を焼失し、現在のお堂は天正年間に再建されたものだという。森に囲まれた、いくつか簡素なお堂や大きな宝篋印塔（ほうきょういんとう）が建つ境内の中央に、薬師如来と文殊菩薩がお祭りされるお堂があった。

実は、伝説の主人公である文殊様は、神積寺の本尊ではない。本尊としてお祭りされているのは薬師如来で、こちらは国の重要文化財に指定されている。

さてこの物語であるが、どういうわけで、はるかに遠い切戸の文殊と播磨の文殊が知恵比べをするなどという話ができただろうというのが、第一の疑問であった。調べてみてひとつわかったことがある。神積寺の文殊様は、現在は「田原の文殊」として親しまれているが、お話の中では「北野の文殊」として登場する。実は、天橋立（あまのはしだて）に近い京都府の宮津にも、「北野の文殊」のお話が伝わっていて、これも同様に「文殊様の交換」話だそうだ。

同型のお話が、人から人へと語り継がれて、いつの間にかその土地なりに変化するというのはよくあることなのだが、このお話もそのひとつではないだろうか。

神積寺には、文殊様の伝説のほかに、もう一つ興味深いものが伝わっている。それは毎年成人式の日におこなわれる鬼追いである。鬼追いは追儼式（ついなしき）とも言い、元来は年越しの行事であった。鬼追いというと「悪い鬼を追い払う」ように思われるが、現在の鬼追いでは、「良い鬼が悪霊を払う」という姿が普通になっているようだ。鬼追いを直接取材することはできなかったが、現在神積寺を管理している悟真院（ごしんいん）のご厚意で、その様子を撮影した写真などを拝見することができた。

地元の人でにぎわう鬼追いには、人々が仏様に寄せる信仰が映し出されている。



文殊菩薩



薬師如来
（本尊）



鬼追い

上記3枚の写真は悟真院提供



悟真院

七種山と金剛城寺



金剛城寺（参道）



金剛城寺（門）



境内の仏様

神積寺から北西へ5kmほどの場所には、七種山金剛城寺がある。聖徳太子の命によって建立されたという金剛城寺は、元は七種山（なぐさやま）中腹の七種滝付近にあったそうであるが、明治初期に現在の場所へ移された。現在の建物の中では、山門だけが七種山にあったものだという。



金剛城寺（本堂）



金剛城寺（庭園）



七種山（遠景）

その風格のある山門を入ると、よく手入れされて、お堂と調和した庭が印象的である。正面には広大な本堂と阿弥陀堂が並び、本堂背後の山腹には護摩堂が位置している。山と庭園が季節ごとに美しく彩られ、お堂のたたずまいと調和して、しっとりとした雰囲気がかもし出す。もう一度、ゆっくり訪ねたいお寺である。



七種滝（看板）



谷筋の道を登る



七種山（近景）

金剛城寺から、さらに北西へ3kmほど行ったところにあるのが、標高683mの七種山で、七種滝はその中腹付近にある。この渓谷にはいくつもの滝が連なっているが、落差72mという雄滝（七種滝）は、兵庫県でも有数の豪快な瀑布（ばくふ）と聞いていた。

ところが残念なことに、取材で訪ねた折は長く雨がなかったせいか滝の水はすっかり枯れており、ただ巨大な岩壁だけが屹立（きつりつ）している状況であった。いつか、雨の多い季節に再訪したいと思う。

この七種滝の渓谷には、「七種の川人（せんにん）」という伝説がある。かつて日照りに苦しみ、種籾（たねもみ）さえなくなったとき、ある村人がここで川人に会って不思議な袋をもらったという。その袋には7種類の種子が入っており、いくら取り出してもなくならなかったという。滝の水が戻ったなら、そんな川人がいたという幽玄郷の雰囲気を、今でも感じることはできるのではないだろうか。

もう一度市川筋に戻って少し上流へとさかのぼると、神河町越知谷（かみかわちょうおちだに）の奥には、「ひょうごの椀貸し伝説を巡る」で紹介した、椀貸し淵（わんかしづち）がある。少し下流の姫路市船津町には、オオナムチノミコトの伝説を伝える粳岡（ぬかおか）があり、その東にはアメノヒボコノミコトが軍勢を集めたという八千種野（やちぐさの）がある。



水のない雄滝



雄滝をのぞく



重なる山並み



椀貸し淵の稲荷社



椀貸し淵の水面



粳岡の遠景

播磨から但馬へ、あるいはその逆へ。時の流れを静かに見てきたであろう市川の流域には、まだ知られていない伝説が眠っているのかもしれない。

用語解説

市川（いちかわ）

兵庫県の播磨地域中央部を流れて瀬戸内海に注ぐ河川。青倉山（標高811m）付近に源流をもち、延長は75.8km、流域面積は596平方キロメートル。神河町の越知川は最大の支流である。市川に沿う経路は、山陰道と山陽道を結ぶ街道（但馬道）として利用されてきた。

円山川（まるやまがわ）

兵庫県北部を流れて日本海に注ぐ但馬最大の河川。朝来市円山から豊岡市津居山（ついやま）に及ぶ延長は67.3km、流域面積は1,327平方キロメートル。流域には平野が発達し、農業生産の基盤となっている。河川傾斜が緩やかで水量も多いため、水上交通に利用され、鉄道が普及するまでは重要な交通路となっていた。

神積寺（じんしゃくじ）

神崎郡福崎町に所在する天台宗の寺院。妙徳山（みょうとくさん）と号する。正暦（しょうりゃく）2（991）年、慶芳上人（けいほうしょうにん）が文殊菩薩のお告げにより創建したと伝えられる。平安時代後期には隆盛し、播磨六ヶ山（播磨天台六山）の一つに数えられた。延慶（えんきょう）2（1309）年、火災のため焼失し、天正15（1588）年に再建された。本尊の薬師如来座像は重要文化財であり、境内の石造板碑（いたび）、石造五重塔などは県指定文化財となっている。創建の故事から、「田原の文殊さん」として親しまれている。

天台宗（てんだいしゅう）

隋（ずい）の天台智者大師により開かれた仏教の宗派。法華経を根本経典とする。平安時代前期に最澄（さいちょう）が入唐してこれを学び、帰国後、比叡山延暦寺を開いて教えを広めた。後にはしだいに密教化した。鎌倉時代には、天台宗より多くの新宗派が出た。

播磨天台六山（はりまてんだいろくざん）

兵庫県播磨地域における主要な天台宗寺院。播磨六ヶ山ともいう。円教寺（えんぎょうじ）、八葉寺（はちようじ）、随願寺（ずいがんじ）、一乗寺（いちじょうじ）、普光寺（ふこうじ）、神積寺（じんしゃくじ）の6寺院。

宝篋印塔（ほうきょういんとう）

本来は「宝篋印陀羅尼経（ほうきょういんだらにきょう）」を納めるための塔。日本では平安時代末ごろから作られるようになり、鎌倉時代中ごろからはその役割が、墓碑や供養塔に変化していった。多くの場合石塔である。

薬師如来（やくしにょらい）

東方淨瑠璃世界（とうほうじょうりせかい）の仏。修行者の時に12の願を立てて成仏したとされ、衆生（しゅじょう）の病気を治し、安楽を得させる仏とされている。仏教の伝来以後、治病の仏として広く信仰された。薬壺（つぼ）を持つ像が多い。

用語解説

文殊菩薩（もんじゅぼさつ）

仏教における菩薩の一つ。文殊師利菩薩（もんじゅしゅりぼさつ）の略。普賢菩薩（ふげんぼさつ）とともに、釈迦如来の脇侍をつとめる（釈迦三尊像など）。知恵の菩薩として信仰されており、「三人寄れば文殊の智恵」などのことわざでよく知られる。

切戸（きれど）

京都府宮津市天橋立文殊に所在する小字（こあざ）。同地には「切戸の文殊」として知られる天橋山智恩寺（てんきょうざんちおんじ）がある。智恩寺は、奈良県桜井市の安倍文殊院、山形県高畠町の亀岡文殊堂とともに、日本三文殊のひとつとされる。

鬼追い・追儼式（おにおい・ついなしき）

鬼会（おにえ）、追儼会（ついなえ）、鬼遣（おにやらい）ともいう。追儼は本来、疫病をもたらす鬼を払う年越しの行事であったが、仏教における新年の行事である修正会（しゅしょうえ：その年の平安と豊穰を祈願する行事）と結びついて各地に広まった。現在では、鬼追いの鬼は儼（疫鬼）を払い疫病を除くものとされている。式では、鬼に仮装した人が松明、鉾、剣などを持って、さまざまな所作をおこなう。なお節分の豆まきも、追儼式が起源とされている。

金剛城寺（こんごうじょうじ）

神崎郡福崎町に所在する真言宗の寺院。七種山（なぐささん）と号する。元の名称は作門寺。7世紀前半、高麗の僧恵灌（えかん）の創建と伝えられ、また法道仙人を導師としたという。8世紀に焼失後再建され、勅命により金剛城寺と称して行基を迎えたという。後に廃寺となったが、17世紀に復興されて作門寺と称した。本来は七種山山中にあったが、明治初年に現在地へ移った。縁起によれば、滋岡（滋丘とも書く）川人（しげおかのかわひと）が、当地の干ばつに際して、人々に鉢から七種の種を分け与えて救ったが、その種は尽きることがなかったといい（「七種の川人」伝説）、これが山号の由来となっている。

七種山・七種滝（なぐさやま・なぐさのたき）

七種山は神崎郡福崎町に所在する山で、標高は683m。峻険な頂上と中腹にある七種滝が著名。七種滝は合計48の滝からなり、兵庫県の観光百選にも選ばれる。うち最大の雄滝（七種滝）は落差72mを測り、県下屈指の規模を誇る。

参考書籍

	書籍名	刊行年	著者名	発行者
伝説	兵庫の民話	1960	宮崎修二郎・徳山静子	未来社
	日本の伝説43 兵庫の伝説	1980	宮崎修二郎・足立巻一	角川書店
歴史・文化	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	兵庫のふるさと散歩3 西播編	1978	兵庫のふるさと散歩編集委員会	21世紀兵庫創造協会
その他	妙徳山神積寺(参拝者用資料)	不詳	妙徳山神積寺	妙徳山神積寺

所在地リスト



七種滝	神崎郡福崎町高岡字七種
七種山	神崎郡福崎町高岡字七種
金剛城寺	神崎郡福崎町田口236
神積寺	神崎郡福崎町東田原1905

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 神と仏

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第1刷 2008年4月1日